丸岡藩騒動記　作造の仇討　（1）　作造と太田又八

作造が太田又八に出逢ったのは天和(てんな)2 年（1682）の正月 3 日、場所は城下の国神神社(くにがみじんじゃ)であった。境内で雪掻きをしている作造に又八が声をかけてきたのである。作造は鳴鹿山鹿村(なるかさんかむら)の百姓で農閑期には丸岡城下で出稼ぎをする。それでも例年なら年末年始は休み、元旦には家族そろって白米飯と干し鰯(いわし)、煮〆濁酒(にしめどぶろく)で祝うのが常だった。だが昨年今年は暮らしに窮して晦日正月も休みなく働いている。年末は正月準備、晦日の篝火(かがりび)用の薪割り、年が明けると晦日から降り続いている雪の始末に追われていた。

神社に泊まり込んで働いている作造に正月気分があるはずもなく、この三日間も玄米に雑穀を混ぜ込んだ糅飯(かてめし)と野菜の煮物、味噌だけの粗末な食事で雑用、といっても体力を消耗する力仕事なのだが、黙々とこなしていた。それでも恵まれている方で仕事にあぶれた者は雑穀さえ口にできず飢えながら正月を過ごしていた。

餓えに耐えかねて盗みを働く小盗人(こぬすっと)、白昼徒党を組み豪農、大商人(おおあきんど)の家に押し込み、米、雑穀、濁酒などを強奪する無法者もいた。いつもなら犯人は容易に割り出され即座に捕縛されるのだが、最近はこの類(たぐい)の犯罪が多発し役人の手が回らない。それを見こして盗み強奪がさらに横行するという悪循環に陥っていたのである。

貧民が増大し、犯罪が横行した原因は二年続きの大凶作にあった。前々年の延宝(えんぽう)八年に台風が日本を直撃して各地で河川が氾濫、田畑が冠水し農作物が甚大な被害を受けた。台風の被害は越前のみならず全国に及び凶作となり小作農は貧民に転落し困窮、なかには餓死する者もいた。

九年に入ると夏場の旱(ひでり)に苦しんだ。極端な水不足は作物の生育を阻み、加えて巨大台風がまたも日本を襲った。辛うじて育った稲も吹き飛ばされ収穫は激減した。二年続きの凶作は大飢饉を引き起こし、昨年に増して多くの民が餓えた。とりわけ苦しんだのは皮肉にも米の生産者である農民であった。

江戸時代、農民は人口の 8 割強を占めていた。彼等の生活を支えていたのは稲作であり、凶作となれば生活の根底が崩れた。収入を他の道に求めようにも受け皿となる働き場はない。入会(いりあい)の山野で柿、アケビ等の果実、ドングリ、ギンナン、栃の実、栗などの木の実、山菜、ヤマイモを採集して飢えを凌(しの)いだ。だがそれも晩秋までで、冬になれば降雪が入山を阻み、それすらも手に入らなくなった。

やがて城下を徘徊する物乞いが目に付くようになった。彼等のなかには行き倒れとなっ

て路傍に屍を曝(さら)す者もいた。死を逃れるためには盗み押し込みに走る者もいた。作造も彼等と同じ境遇にあったが、物乞いになることもなく盗みに走ることもなく家族を守っていた。

加賀越前にまたがる加越山系から越前の平野を流れ日本海に注ぐ九頭竜川がある。作造はその九頭龍川の堤防近くに二反余りの田圃(たんぼ)を有していた。もちろん自作地だけで生活はできず小作人として働くという、この辺りでは典型的な小作農民であった。それでも一家は作造、母のヨシ、女房のタエ、長男喜助、長女キクが貧しいながらも肩を寄せ合って生きてきた。

穏やかな生活が一変したのは延宝 8 年の台風で、豪雨によって増水した九頭竜は堤防を越え田圃を泥沼と化した。その年、作造の田圃からの収穫は皆無で小作料も前年の半分以下であった。小作農一家に蓄えがあるわけもなく、来年用の種籾はもとより手持ちの食糧で春まで一家を食いつながせることは不可能だった。

作造は大地主でもある庄屋の宗衛門から米を借り、種籾を残して米の大部分を安価な雑穀に変えた。とりあえず飢えからは脱したのだが日々の食事は僅かな玄米に麦、粟(あわ)、稗(ひえ)、などの雑穀類、木の実、大根などの野菜を混ぜた糅飯(かてめし)で、川魚、田螺(たにし)蜆(しじみ)を添えて飢えを凌(しの)ぐという粗末な食事だった。

だが災難は続いた。悪性の風邪が城下、村々に蔓延した。ヨシも罹病(りびょう)した一人で延宝 9 年 2 月、四十八年の生涯を閉じた。遺体は 3 年前に死んだ夫に寄り添うように埋葬された。この年、飢饉に風邪の流行が重なり幼子、年寄りの死がいつもの年に倍して多かった。

春になり作造、タエは田植えで多忙を極めた。自作地を早々に済ませ、夜明けから日の落ちるまで庄屋から小作を引受けて働いた。だが梅雨の季節に雨は降らず夏の酷暑で大地は干上がった。旱魃の被害は深刻で作物は枯れ、僅かに育った稲も二年続きの台風の直撃で吹き飛ばされ収穫は激減した。

延宝年間は 8 年、9 年の台風被害だけではなく、5 年に十勝沖地震、房総沖地震、6 年には宮城北部沖地震が発生している。相次ぐ災害に元号は 9 年 9 月 29 日（1681 年 11 月 9 日）、改元されて天和(てんな)となった。

天和元年の師走は前年に増して悲惨であった。物乞いが巷に溢(あふ)れ、餓死者が続出した。事態の深刻さに藩も動きを見せた。貧民への施米(せまい)だが藩財政も悪化しており、焼け石に水の状態だった。

作造一家も困窮した。昨年の飢饉は借り米で切り抜けたが、凶作で返済が滞った今年は追加の借り米は断られた。それでも二反の田圃を形に米を借りた。

むろん作造は田圃を手放すつもりはない。そのためには必死に働き来年の収穫で返済しなければならない。できなければ田圃は取り上げられる。餓えても種籾には手を付けず、玄米の姿さえ見えぬほどの糅飯を常食としながら来年の収穫に望みを繋いだ。だが師走に入ると雑穀すらも尽きはじめた。山で雑木を切り、薪として町家に売り歩き、そのかたわら土木、大工、荷役等の力仕事を引き受けて幾ばくかの銭、食べ物を貰って生活の糧としていた。彼は仕事を選ばず、骨身を惜しまず働いたから依頼主の評判もよく仕事が途切れることはなく、仲間に仕事を回していた。

それでも路上に放置されていた死体の埋葬はさすがに断った。死因は餓死ではなく疫病との噂が流布しており、協力してくれる仲間がいなかったからである。身元不明人の死体は人里離れた山間の無縁墓地に埋葬されるのだが、その仕事は賤民が担っていた。だが疫病の噂が広まると（実際は流行性の風邪なのだが）、伝染を恐れて彼等は仕事を拒んだ。困った役人が死体の埋葬を作造に依頼してきたのである。作造も断り、誰からも見放された死体はいっそう無残な姿を曝し続けていた。このままでは正月を迎えられない、死体を川に流そうという声が町方衆からあがった。

いったんは断ったものの路傍の仏が哀れでならぬ。無残な姿に心を痛めた作造は仲間を説得し埋葬の仕事を請け負った。彼等は仏を丁重に扱い、埋葬を終えると手を合わせて成仏を願った。仏は我が身だったかも知れないのだ

丸岡藩家老、太田又八は作造の行為を本光院月窓寺住職、寂誉から聞かされた。

本光院は本多家の菩提寺で本多重次（作左衛門。成重の父）、成重（本多丸岡藩初代藩主）、重能（2 代藩主）、重昭（3 代藩主）が祀られている。又八は重次以下、歴代藩主の命日と師走 29 日と正月 3 日に墓参りをする。その後、寂誉から茶菓の接待を受け雑談を交わす。この雑談が又八に城下の貴重な情報をもたらした。

寂誉は頼まれれば町屋にも出かけて御経をあげる。気さくな人柄で、心を許した主人や女房は城下の出来事を具に話した。

「一本田の地主、藤右衛門が苗字帯刀を許されたそうですが、藩のお偉方に米２百俵献上したという噂があります」という話から、

「吉屋の旦那が妾を囲いました。その妾というのが 50 俵（20 石）取りの下士の娘だそうです。お金で買われたのでしょうが、こうなると百姓もお侍もないですな」

「北前船が頻繁に三国湊に寄港していて、上新町（福井藩）界隈では商人や船頭相手の遊郭がたいそう賑わっているそうです。滝谷村（丸岡藩）にも遊郭をつくろうかという話がもちあがっているそうです」

「橘屋さんに盗人が入りまして、それが不思議なことに金目のものにはいっさい手を触れず、米５升だけを盗んだそうです」
「大店の野村屋さんが押しこみに遭いました。夜明け前のことで賊は 10 人足らずでしたが奉公人は住込みの者、それも大半が女中とあって抗うことはしなかったそうです。幸い怪我人もなく店が壊されることもなかったのですが、蔵にあった米 10 俵、豆 1 俵、味噌 1 樽、酒 2 樽が荷車に積まれて持ち去られました。言葉訛りから加賀者、おそらく山竹田辺りの国境から入りこんで来たのでしょう。役人が駆けつけた時には加賀領に逃げ込んで、手も足も出せません。まあ、越前の方でも加賀で同じようなことをしているのでしょうから。案外、双方が示し合わせて企みを練っているのかも知れません」

寂誉は町で耳にしたこと、感じたことを話す。藩政がらみであっても口を閉ざさない。

「重益様は闇鈍な藩主で、政の是非をわきまえず日夜酒食に耽っている。そのような他愛もない流言飛語が広がっております。噂の出所は家臣らしいのです。寄りによって家臣の口から殿の悪口雑言とは・・・嘆かわしい限りです」

「城下に浮浪者が溢れています。土地を手放した百姓衆で今は物乞いで生きていますが、そのうち見切りをつけて他国に逃散する者も大勢出てくるのではないかと恐れながら杞憂しております」

寂誉の話を又八は黙って聞くだけだが忸怩たる思いである。彼は家老の要職にある。だが名前から推測されるように名門の出ではない。父は 70 人扶持（140 石相当）の家臣であった。上士（上級武士）とまではいかない。

父の跡を継いだ又八は利発者で先代藩主、重昭に見込まれ近習に抜擢された。次第に頭角を現し側近となり、重益の治世になると千石取りの家老に抜擢された。彼が家老に抜擢された経緯、政敵、本多織部との争いについては後述するとして、とりあえず寂誉の話を続けたい。

「師走に入って路上死が目に付くようになりました。浮浪者たちの成(な)れの果(は)てです。物乞いで幾ばくかの食べ物は得られるでしょうが厳寒に老人や病人が路上生活することは無謀です。凍死する者、衰弱して物乞いすら出来ず餓死する者もおります。悲惨なことです」
寂誉の言葉は鋭い矢となって彼の胸を貫く。

又八は無言のままである。
（重益公の噂は事実、流言飛語の類(たぐい)ではない。のみならず家臣は殿に不満を抱いている。それも無理はない。借上(かりあ)げと称して家臣の俸禄(ほうろく)の一部を返上させ、酒色に溺れ贅(ぜい)に耽(ふけ)っておれば批判がでるのは当然であろう）

又八は苦悩する。重益の乱行は執政である又八の責任であるが、彼にしても打つ手がないのだ。
己が享楽の他には興味を示さず、欲望のままに行動する、まるで幼児のような重益公である。家臣を犠牲にして己が享楽にのみ心を奪われるようでは皆の心は離れ、家中が乱れる。家臣だけではない、凶作で苦しんでいる民百姓から怨嗟の声も起きようと、理を尽くして幾度となく諌めても馬耳東風(ばじとうふう)である。この頃は又八を遠ざけ、甘言を弄(ろう)する奸臣(かんしん)を側に侍らせるようになった。

（奸臣の背後には本多織部がいる。織部は不正が露見し又八によって藩を追放された前家老である。織部の排除には成功したが配下の者たちは未だ城中に巣くって隠然たる勢力を有していた。織部は復讐の機会を狙い、配下の者を使い放蕩者の重益と謹厳実直(きんげんじっちょく)な又八を離反させようと画策している。事は織部の狙い通りに進んでいた。いずれ重益は奸臣どもに唆(そそのか)され織部を呼び戻し又八を排除するであろう。その先は家中に魑魅魍魎(ちみもうりょう)が闊歩(かっぽ)し、藩は滅びる。その前に手を打たねば・・・）

（重益公を傀儡(かいらい)とするために酒色に溺れされた本多織部が諸悪の根源、獅子身中(しししんちゅう)の虫と断じ排除したが、酒色好みは重益公の持って生まれた闇鈍な性格による。容易に奸臣を呼び込むのはそれ故である。とすれば藩にとって諸悪の根源は織部ではなく重益公そのものではないか）

（さすれば為すべきことは唯一つ、重益公に隠居を迫る）又八の秘めたる決意である。彼はゆっくりと茶をすすった。

「暗い世相ではありますが、士(さむらい)もおりますな。もっとも身分は百姓ですが」寂誉が言う。
「ほう、どのような御仁(ごじん)ですかな」始めて又八が口を開いた。
「浮浪者のなかに路上死する者がいることは先に述べた通りですが、その死骸が放置され

たままでした。一昨年から悪い病が流行(はや)っており、路上死はその病が原因との噂がたちまして誰も近づこうとしないのです。正月を控えて不吉この上もないと皆が案ずるのですがどうしょうもありません。仕方がなかろうと川に流すことにしたのですが、そのとき鳴鹿山鹿村の作造という男が埋葬を引き受けたのです。彼が申すには、
『路上死した者も貧農、我も貧農。とても他人事とは思えません。さぞかし現世(げんせ)では悲惨な暮らしを送っていたでしょう。死ねば皆仏との教えがございますが仏になっても犬畜生の如く川に流されては成仏できません。せめて埋葬して弔いたいと思います』
あっぱれな心根でございます。むろん異存のありようがございません。作造という男、仲間 3 人を説得して共に仏を埋葬したのでございます。
心根もそうですが、胆力といい、誰もが尻込みする仕事を、作造の頼みならと引き受けさせる人徳(じんとく)といい、見事なものでございます。あれほどの人物家中でもそうはおりますまい」

「その男に逢ってみたい。鳴鹿山鹿村の百姓と聞いたが訪ねてみるか」
「その必要はございませぬ。作造は今、国神神社で下働きをしております。年の頃は 25、6、の屈強な男でございますから直ぐにおわかりになります」寂誉が言った。

太田又八は寂誉に礼を述べ、その足で国神神社に向かった。又八が作造に声をかけたのはそのような経緯からであった。